

# 藤間家三代

共立女子大学教授

近藤 瑞男

今年の九月に、六世宗家勘十郎生誕百年と康詞さんの成人を祝う会が開かれます。現宗家とは大学時代以来のお付きいのため、六世宗家からも幼い頃からの様々貴重なお話を伺いました。二代宗家からの話を中心に、藤間宗家の流れについて、二号にわかつて記してみようと思います。

## 誕生

六世宗家は明治三十三年十月八日生まれ。西暦ではまさに千九百年。生前六世が「私は西暦の方がわかりやすいんです」と語っていたのを聞いた方もいらっしゃるに相違ない。

本名は保住秀雄。母は、きく（喜久）。洲崎の引手茶屋、松本を商う亀吉の娘でした。父親は深川高橋の御米屋小島三平ですが、縁は薄かったようです。藤間に養子に来てからは、保住家ともほとんど行き来はなくなつたようで、明治末という昔の事でもあり、親族に関しては六世宗家はあまり思い出がないようでした。亀吉が芝居好きであつたせいで役者達も松本に遊びに来ており、

明治三十九年、六歳の時、六代目尾上梅辛のもとに弟子入りする事になります。しかし梅辛には同じ年の息子（栄三郎）がいたため、秀雄は菊次郎（当時美雀）の部屋子として預けられました。芸名は尾上梅雄。初舞台は、明治四十一年五月、歌舞伎座の『義経千本桜』の安徳天皇でした。ただし小手調べに浜松で、『幡隨長丘衛』の息子長松を、その数か月前、中車（当時八百歳）の長兵衛、梅幸の女房で演じています。江戸の歌舞伎の残光が失われ、新しい時代が訪れようとしていた頃でした。

『め組の喧嘩』の辰五郎の子又八、『裏表千代秋』の千松、『佐倉義民伝』の長男などの子役の他、子供芝居では、神田三崎町の東京座で『鞘當』の名護屋山三、市村座で『源氏店』のお富などの役々を演じています。千松を演じた時には、政岡を演じていた六代目菊五郎が舞台の上で実際にご飯を炊いて、よい匂いがしたという話を懐かしそうになさいました。『演芸画報』などに、六世宗家の幼い頃の姿を見る事ができます。

▲義太夫「鉄輪」六世宗家  
要会（昭和50年5月4日）



▶長唄「石橋」六世宗家・七世宗家  
正州会（昭和59年12月13日）



▲義太夫「鉄輪」六世宗家  
要会（昭和50年5月4日）

ましたけれど、その時ははじめて亀吉から、本当の父親が三平だって聞かされたんですよ。

六世にとつては生涯忘れられぬ日であったでしょう。その日の内に植木店にあつた五代目藤間勘十郎の家に入つたといいます。藤間の跡を継げるのは、嬉しいと思いましたよ。自分がえらく出世したような感じがありました。けれど役者をやめるのはつまんないなとも思いましたね。ただ十五歳という事で中途半端な頃ですから、女形として舞台に立つよりも振付けの方がよいとは考えました。

こうして藤間の家に入った六世は、義母に仕えながら踊りの師匠としての生活を始めます。藤間家は五世の姉定、五世の子清治との三人暮らしで、朝八時頃から夜八時頃まで、母と共に踊りの稽古を付ける毎日です。三味線を弾けなかつた六世は、母の口三味線を聞く内、自然と弾けるようになり、これもつらいとか勉強とかではなく、当たり前だと思つていたそうです。

この時代、母の考えによつて六世は要とも名乗つています。母は口やかましくて、むずかしい人でした。三人組んでい

です。もう決まってたんですね。自分の考えなんてありませんし。そんなもんです。そんなん相談なんてありませんし。そんなもんです。その日に、三平からも電話があつて、それまでは知らずにおり

## 藤間家への入籍

梅雄に転機が訪れたのは、大正四年、十五歳の時でした。

一月の千秋楽の朝に、祖父の亀吉から、「お前、今日養子に行くんだよ」と言われました。「どこへ行くんですか。」と聞きましたら、「藤間へ行くんだ。」って、はじめて聞いたんですね。もう決まってたんですね。自分の考えなんてありませんし。そんなもんです。そんなん相談なんてありませんし。そんなもんです。その日に、三平からも電話があつて、それまでは知らずにおり

ようになつたんですから、母のお陰だと思います。

## 劇場振付け師に

母五世勘十郎が、六代目菊五郎の新作舞踊の振付けを受け持つ事が多かったため、やがて六世も振付けを行うようになりますが、初めての振付けは清元の『柏の若葉』でした。二十五歳頃、藤間会の折、適当な御祝儀曲がなかったので振付けたのです。

やがて大正十五年に五世が隠居、六世が家督を継いで昭和二年十月に市村座で披露が行われました。それをきっかけに六代目菊五郎が、劇場の振付師として六世を抜擢するのです。

六代目菊五郎付きの振付けになつたのですが、六世が梅幸の弟子であった事から、その縁で帝國劇場の振付けもということになり、歌舞伎座と帝劇の両座の振付けになりました。しかし六代目に多く振付けています。

こうした裏には、五世勘十郎に恩義を感じていた六代目菊五郎の感謝の思いがあつたからなのようです。六代目は著書『おどり』の中に「今の勘十郎も私の弟子です。先代の勘十郎に教わったのとで、その恩返しに教えました。」と記しています。

六代目は怖かった。「今度こういう事になるけれど、お前には過ぎた仕事だから、しっかりやれ」って言われました。当時、振付は誰もいませんでしたから、大変な責任の重さです。自分よりえらい仕事ですから。歌舞伎座のためという事ですからね。

振付け師藤間勘十郎の誕生です。

(次号に続く)



▲長唄「橋弁慶」六世宗家・藤間康詞  
第3回勘十郎の会（昭和63年3月31日）

## 第三十二回



### 私と踊り

藤間千鶴／白沢千鶴子さん

#### ●踊りに憧れて

ほとんどの方は、小さい頃からお稽古を始めていらっしゃいますが、私が踊りを始めたのは女学校を卒業してからです。父親は新潟県の糸魚川で建設業をしていたのですが、私が三歳の時に荒地を買ひ、劇場も始めました。その劇場では、歌舞伎や大衆演劇など色々な興行をやっておりましたので、私も踊りに対する興味が自然に生まれたのだと思います。

中でも、長谷川一夫さんの『男の花道』という映画の踊りの場面を見た時に、「なんて素敵なお踊りを習いたい」と感動したことが、私の気持ちを決定づけました。

「踊りの道に入りたい」との想いが膨らみ、師匠さんに踊りを習いたいと感動した。これが、私の気持ちを決定づけました。

「踊りの道に入りたい」との想いが膨らんで、長谷川一夫さんの『男の花道』という映画の踊りの場面を見た時に、

「なんぞや、お稽古に参りますと、御宗家は藤間のために新潟から来ているのだから、普通の人と同じ時間に来てはいけま

せん。」とおっしゃつたのです。それから私は、朝は皆さんが寝ている時間に伺い女中さんのお手伝いをして、夜は遅くまでいて役者さん達のお稽古ぶりを拝見させていただきました。先代の御宗家は、ご自分からはあまり注意ならない方でしたが、「注意されるのを待つていては駄目。いいものを自分から吸収してもらいました。」「習うのなら日本一の先生に入門しなさい」と踊りに明るい親戚から勧められ、先代の御宗家に師事することができました。習い始めてから、あの長谷川さんが御宗家のお弟子さんだと知り、本当に驚き、感激いたしました。

現在の御宗家も、やはり優れたものをお持ちです。一緒に踊っていて、ちょっと時間が早くなってしまった時でも、その場でポンと合わせて下さるんです。周囲に気を配つて下さるのもありがたいですし、本当によくやつていらっしゃいます。踊りは私にとって心の支えです。これからも、宗家藤間流のよさを大切に、踊りの道を歩んで行きたいと思います。